

大隅（うしみ）郭の城壁

この高さ7メートルの巨大な大隅郭の写真は、1920年代後半に撮影されました。この壁は今帰仁城の主要な防御壁であり、城の大隅郭を囲んでいます。今帰仁の他の壁と同様、未加工の硬い灰色をした古期石灰岩で作られています。壁の外側の層には大きめの石が使われており、その隙間には小さな石が詰められています。「野面積み（のづらづみ）」と呼ばれるこの技法は、付近で採れる石の硬さに適した唯一の方法です。また、この技法は石垣を構築する技術としては最も早期に発展したと考えられています。他の琉球の城で使われた柔らかい石灰岩は、より緻密な石工技術を用いての加工が可能でした。石を長方形に整形し、規則正しく何層にも並べるのは、見た目が織られた布に似ているため、「布積み」と呼ばれます。最も高度な技法は、石同士をぴったりと合う多角形に整形してから組み合わせる「相方積み（あいかたづみ）」と呼ばれる技法です。これらの壁を築く技術は、首里城、中城城、勝連城などの他の沖縄の城でも見られます。

沖縄の石造りの城の建設は、日本本土よりも約100年早く始まりました。日本の城と同様、琉球の城はいくつものしっかりした囲い（郭）で区画が分けられており、最も堅牢な区画は最も高い場所にあります。今帰仁の城壁の優美な弧形は琉球の城に典型的で、中国か韓国の影響を反映している可能性があります。他方で、日本の城壁はきっちりとした幾何学的な角形をしており、輪郭には傾斜がついています。琉球の城には、日本の城の特徴である大きな多層階構造の天守はありません。

今日見られる今帰仁城の城壁の大部分は建築時のままの姿ですが、一部は長い年月の間に自然に、またはほかの理由によって崩落しています。常に修復維持工事が行われています。

+++++

正門

これは城の正門で、大きな一枚岩の屋根が付けられており、巨大な見張り棟に守られています。門の両側にある狭い長方形の開口部は、1962年に完了した修復の際、弓兵が使うものという体で追加されました。